

道徳科 明確な指導観に基づく発問の工夫

道徳科の授業づくりにおいては、子どものよさや課題を明らかにして、授業で何を考えさせたいのか、その方針を焦点化する「明確な指導観」を確立することが何よりも重要です。指導観は、「価値観」「児童生徒観」「教材観」の三つの要素から成り立っており、指導観が明確になることで、ねらいとする道徳的価値の理解を深める発問を工夫することができます。

1 指導観を明確にする

<指導観の例>内容項目：節度、節制 小学校第1学年「かぼちゃのつる」旧文部省

価値観

ねらいや指導内容についての授業者の捉え方であり、当該の内容項目について特に大切にしたいことを「ねらいとする道徳的価値」としてまとめたもの

児童生徒観

授業者の価値観に関連する子どものこれまでの学習状況や実態、授業者のねらいなどをまとめたもの

教材観

子どもに考えさせたいこと、学ばせたいことを、どのように具現化するかを明確にするために、教材の特質やそれを生かす活用の方法などをまとめたもの

価値観
↓

児童生徒観
↓

教材観

子どもたちに、わがままを抑えることの大切さに気付かせたい。

「節度、節制」は、健康や安全に気を付け、物や金銭を大切にし、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をするのが指導内容ですが、「本時では特にわがままを抑えることの大切さに気付かせることを重視しよう」というように、ねらいとする道徳的価値を絞り込みます。

よさ：子どもたちは様々な場面で自分の置かれた状況について考えながら生活できるようになってきた。

課題：ともすると低学年の特徴でもある自己中心的な考えでわがままに振る舞って失敗してしまうことがある。

これらの実態から、わがままをして失敗したときの考え方、感じ方を想起させることで、節度ある生活をしようとする態度を育てたい。



実態からどのように教材を活用するか考えます。

授業の中心を、子どもたちがつるを荷車にひかれたかぼちゃに自我関与して、その考え方、感じ方を自分の体験などから類推する学習とする。

2 発問を工夫する

【ねらい】わがままを抑えることの大切さに気付かせ、節度ある生活をしようとする態度を育てる。

次の手順が有効です。

- ①ねらいに深く関わる中心的な発問を考える。
- ②中心的な発問による学習を充実させるための基本発問を考える。
- ③全体を一体的に捉えるようにする。

基本発問 1 「つるをぐんぐんのぼしているとき、かぼちゃはどんな気持ちだったか。」

○「自分がわがまま放題しているときの気持ち」を考えさせるための発問

基本発問 2 「みつばちやちょうに注意されたとき、かぼちゃはどんなことを考えたか。」

○「自分のわがままを注意されたときの考え」を考えさせるための発問

中心的な発問 「車にひかれてつるを切られてしまったかぼちゃは、どんな気持ちだったか。」

○自分がわがままをして失敗したときの考え方、感じ方を想起しながら、節度ある生活をするための発問

児童が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、自己を見つめたり、物事を多面的・多角的に考えたりするための思考を深めることができるよう工夫します。

